

ベトナム詩の形魄 自由への渴望

ヴァン・タム／川口健一訳

ベトナム詩の各様式の正格は、中国定型詩のように厳格すぎることはなく、元来かなり「闊達」なものであるにもかかわらず、いくつかのその「闊達」さえも、ベトナム詩人の詩的感興の充溢、流出を押し留め難く、自由への渴望であるかの如く―変体、変式、変格、破格というそれぞれの操作によって容易に亀裂が生じ、甚だしくは破碎するほどに、つねに伸縮を被っている。

何世紀にもわたり今日まで、「格を破り、調律を捨てて」要求は、一般的にベトナム詩歌の様式を生成、発展させた規律なのであり、二〇世紀半ばに「ベトナム詩歌における革命」すなわち、新しい詩を唱えた著名な詩人タン・ダー（一八八九―一九三九）の個人的標語では決してない。

初めに、はるか以前に出現し、その後著しく広まった、「ベトナム特殊」の腰韻をもつ六―八音節（六音句末の第六音節と八音句の腰音第六音節が押韻する）対詩句から成る六八体詩、すなわち現代の卓越した何百ものベトナム詩に形魄を与えた詩形式、ベトナム文学史における最高の詩作品であるゲン・ズー（一七六五―一八二〇）の『翹伝』の詩形式、ベトナムの豊富な民間詩歌の宝庫において最も日常的に生れ、簡潔ではあるが不朽の精華ゆえに長久の生命をもつ幾多の作品を留めてきた詩形

式について述べよう。

然るに、繁茂した六八体詩の園において少なからざる詩が句のなかの音節数を伸縮させ、六八を「六八変体」と成している、すなわち上句が六（六音節）、下句が八（八音節）の詩句ではなく、「七八」（上7、下8音節）、「九八」（上9、下8音節）、甚しくは、「六・十一」、「六・十二」（上6、下11、12音節）等々と変えており、韻（音楽性にとつて最も必要な周期による音響）に関しては、六句末第六音節が八句腰音第六音節と押韻すべきところを、八句第四音節腰音（当然、「変体」句が正格六八体の前身である場合を排除しない）と押韻したりしている。民間詩歌における「六八変体」の例外は、『カーザオ（歌謡）の詩学』（一九九二）の著者である研究者ゲン・スアン・キンが「（…）民間の作者はあらかじめある規則にそれぞれの創作を枠付けしようとせず、（…）平仄律を遵守しようとする意識はあまりない」と総括しているほどに多様である。注意が必要なのは、この「変体」韻の型が単に、「民間作者」の口承詩歌にのみあるのではなく、『李公』などの作者不詳の詩物語という成文作品にも、さらに博学の文学作品である『天南語録』（一八世紀）等々にも出現しているということである。

ベトナム文学において六八体の「兄弟」と見なせる、同様にきわめて普遍的なもうひとつの詩形式、それは双七六八体（研究家によっては様式に関する「仮」の自由と呼ぶ詩形式）であり、「変体」の様式も相似である。例えば、四詩句（7—7—6—8の音節が繰り返される）から成る群れ（花の群れの如く）において、第一の七音句末音節は第二の七音句の五番目の音節と押韻すべきところを、この句の三番目の音節と押韻している、等々……等々。

変体……破格という自由への渴望は近世ベトナム詩のなかの「降職昇官に愛想をつかし」（グエン・コン・チュー）、「拘鎖の外で」で「古今を攪拌し」たいと欲する豪放な「士人」（知識人）階級の産物である語り歌（一八、一九世紀頃に出現）の詩形式、つまりベトナム文化の独特な歌籌（カチユ）という「听房」歌樂生活における主要な詩形式において、多分最も顕著に体现されている。一編の語り歌は普通、簡潔な句を合せて十一そなえもつ三段から成り、それらの句は民族の喃字も外来の漢字も撰取を許しており、同時に駢偶文、対句、六八体、双七六八体、唐律七言、さらには「しまりのない不揃いな長い句短い句」（ホアン・ソン「歌伎歌」一九四〇年）の長短句など、古今詩文のさまざまな様式の「大団円」を容認している。しかしながら、語り歌の一編一編には三段（順に、4句、4句、4句、そして3句）が求められるという簡単な尺度を前に、多数の語り歌作者が「変式」、すなわち普通は「中段欠落」（詩編が7句のみ）となる「段欠落」で創作したり、あるいは単に「二段追加」するだけでなく、時には六、七段「追加」したり、「気の向くまま何段でも」（グエン・ヴァン・ゴック「陶娘歌」一九三一年）だらだらと「追加」す

る「段追加」で創作してきた。

近世語り歌の変式……破格の精神は新しい詩（一九三二年開始）が積極的に受け継ぎ、長期広範に発展させ、「詩歌における革命」を引き起こした。

新しい詩とは全くすつかり新しいのではなく、刷新しつつ継承した、つまり「断」ちつつ「償」った（僧侶の言葉による）のである。新しい詩は、六八体、双七六八体、……という古くから伝わる各様式を普段に使用した。様式に関する革新性は主に、各句が七音節、八音節、及び自由—合体、さらにこれに連韻、斜韻、抱韻、自由韻、等々の押韻型が加わる作詩法にのみ見られる。その新しい詩の各種類にあつて自由—合体は形骸についての最も明らかで力強い自由渴望の精神を表現する詩の類である。

この真正の「詩歌革命」における自由—合体形式が約六%（約五〇〇編の新しい詩に基づいた筆者の一九九二年統計）を占めるにすぎないのに対して、『抗戦詩一九四五—一九五四』（新作品出版社、一九八六年）と『八月革命後のベトナム詩』（文学出版社、一九九二年）の詩の選集を眺めると、一九四五年以降、ベトナム詩歌における自由—合体詩の割合は発展し、四〇%以上に急激に高まっている。すなわち、今日に至るも、ベトナム詩の形骸は依然としてうねるように自由を渴望しているのである。この渴望は、抗仏戦（一九四六—一九五四）の初期に出たグエン・ディン・ティの震撼に満ちた独特の非韻文詩の諸編の如く、流星の輝きにも似てぱっと明るくなることとがいく度かあった。詩思内容に対する詩学の規範は、存在を引き留め、かつ高々と飛ぶことを保証する両作用をもつ風

の糸に似ている。もし形式が侵害されたなら、どこに内容を任せるのか、誰にも明白なことである。だが、いく度も、ベトナム詩の形魄は「変」を被り、「破」を被り、等々にもかかわらず、何故にベトナムの詩歌は依然として存在し、甚しくは成果が次々に現れるのか？ベトナム人は「芸術の能力に富む」（少なからざるベトナム民族学者が肯定する如く）ゆえに、詩歌の創作に際し、この芸術様式の基本的特徴を維持するのに敏感であるからなのであろうか。

ハノイ、一九九九年十二月

ヴァン・タム氏紹介

ヴァン・タム氏は一九三三年タイン・ホア省のお生まれで、一九五六年に文科大学（後に統合されハノイ総合大学となり、再統合後今日のハノイ国家大学）をご卒業された。

ヴァン・タム氏は長いこと教育関係の仕事に携わる傍ら、ベトナム文学研究に忍耐強い努力と情熱を傾けてこられた。しかし、氏の業績の発表年代からも類推できるように、その歩みは決してなまやさしいものではなかった。

ヴァン・タム氏の主要業績は、一九二〇～四〇年代前半におけるベトナム近代浪漫主義文学の研究に関するものである。浪漫主義文学とはやや性格を異にするが、作家ヴー・チョン・フン（一九一二～一九三九）に関する研究書を一九五七年に出された後、ベト

ナム近代浪漫詩の先駆的詩人タン・ダー（一八八九～一九三九）を論じた『タン・ダー 大きな矛盾』を一九六四年に上梓する。これは、タン・ダーの人と文学観を詩人が生きた複雑な時代状況のなかで丹念に考察した詩人論であり、労作のひとつといえる。時に、ヴァン・タム氏は三一歳であった。しかるに、当時のベトナムは国家が南北に分断されており、北ベトナム（ベトナム民主共和国）においては社会主義の政治体制をめざす国家の建設と南ベトナム（ベトナム共和国）の民族解放闘争支援が政治的軍事的な国家目標となっていた。当然のこと、文学は政治に奉仕すべき手段としての役割を課され、ソ連（当時）に範を取った社会主義リアリズム文学の文芸路線が呼号されていた。浪漫主義文学の研究はテーマそのものが異端視され、批判されこそすれ、決して迎えられるような状況ではなかった。一方、日本を含む西側におけるベトナム浪漫主義文学の研究はハノイの文芸路線の対極をなし、その重要性は文学本来のあり方において正當に認識され、評価されていた。

ヴァン・タム氏は、一九六四年のこの著作以降、一九七〇年代、一九八〇年代と著作活動における空白の二五年余りが続く。これが大きな変化を見せ始めるのは、一九八六年に始まり、今日に至るドイ・モイ（刷新）政策の進展によってに他ならない。氏はこれまで自分の胸のなかに仕舞い込んでいた思いを一挙に吐き出すかのように精力的に研究書を出し始める。『浪漫主義文学講義』（一九九一年）、『千古事』に寄せて（評論集、一九九二年）、『ベトナムの詩 一九三〇～一九四五』（共著、一九九三年）、『ドアン・フリー・トゥー 人と作品』（一九九五年）、等々。特に、最新評論『ドアン・フリー・トゥー 人と作品』は全六六

一ページに及ぶ文字通りの労作であり、多分、氏のライフワークとなるものと思われる。一九四〇年代前半に活躍し、当時のベトナム文学界に新風を巻き起こした前衛的文学者ドアン・フー・トゥー（一九一〇～八九）に関する研究はベトナムにおいてはほとんどなされてこなかった。ドアン・フー・トゥーたちの文学グループは文芸思潮としては浪漫主義的潮流のひとつの到達点に位置するものと捉えてよいであろう。半世紀を経て、ベトナム近代文学史の空白部分がようやくベトナム人自身によって埋められ始めたのであり、ヴァン・タム氏は現時点におけるその最大の功労者に他ならない。（なお、ヴァン・タム氏は一九九六年に脳内出血で倒れたが、その後、奥様の手厚いご看護とご介助を得て、徐々に健康を取り戻しておられる。左腕不随という後遺症の療養生活を送られているなかにあつて、今回の原稿執筆を快諾され、玉稿を寄せてくださいました。ヴァン・タム氏に心より感謝申し上げますとともに、氏の一日も早いご健康の回復をお祈り致します。）

（川口健一記）



ヴァン・タム氏ご夫妻